

彼女の秀でたおでこをやさしく撫でてやると、高山は、再度腰を進め、彼女を征服しにかかる。

「ん、つく。つふう……」

食いしばった齒の隙間から、苦悶の声がもれでてしまうものの、高山を信じて身を任せると決意したあと、舞羅は一言も「痛い」と口にしなかった。

その根性に、高山はあらためて彼女に惚れなおす。

しばらくして、ペニスが膣内の引っかかりに到達する。

そこは、舞羅が初めて男を迎え入れる証であり、同時に最後の砦^{とりで}でもある。

「……いくぜ」

「……ん」

唾を呑みこんだ高山が、慎重に慎重に体重をかけてゆく。

舞羅は青ざめながら、唇をきつく噛みしめる。

急に時間の流れを遅く感じる。

「——っ!？」

ややあって、彼女は、身体のなかでぶつくとゴムが弾けるような感覚を覚えた。途端、ずずずと肉棒が最奥まで侵入してくる。



あゝっ

あんっ

んっ!

っっっっ...

「つく、あ、っはああああつ！」

さすがの舞羅も目尻に涙を浮かべて、身体を思いきりのけぞらせた。すさまじい痛みと拡張感から逃れたいとつさに考えてしまう。

（っはあああ、い、痛い、ですわ。だ、だけど、わたくし、高山を信じるって……。決めたのだもの）

彼女は拳を握りしめて、破瓜^{はか}の痛みに耐えると彼を受けとめた。

「あ、っは、はあああ、ん、っふ……」

太い衝撃に貫かれ、浅くしか息ができないため、胸を小刻みに上下させて、必死に空気をかき集めるように吸う舞羅。

彼女の頬を撫で、目尻に浮かんだ涙を拭^{ぬぐ}つてやると、高山は言った。

「痛いだろうに、ありがとな」

「ん、っふ、ふう……」

まともに返事をかえしたいのに、言葉が出てこない。

そこで舞羅は、何度も何度も彼に向かって小さくうなずいてみせた。

「すぐに、よくなるらしいから。もうちつとの辛抱だ」

彼女の頭を撫でてやると、高山は彼女のクリトリスをいじりながら、ゆっくりと腰

を動かしはじめた。

まだ、開かれたばかりの硬い膣はぎしりときしむ。

奥を貫くたびに、無数の突起が剛直へと絡みついてきて、狭い膣から強烈な圧を持つて侵入者を外へと追いだそうと絞りたてる。

「……つく！」

ぎこちなく何度か腰を往復させただけで、こらえ性のない高山は、早くもイキそうになってしまう。

しかし、舞羅が気持ちよくなってからでないと、と懸命に射精の衝動をこらえ、必死の形相で抽送を繰り返す。

「あ、あは、んっふ、んんっ……。や、あ。こんな恥ずかしい、こ、え」

しばらくすると、ようやく彼女の喘ぎ声に愉悦の色が混じりはじめ、高山は胸を撫でおろした。

「俺は、もっと聞きたいぜ？」

と、不敵な笑みを浮かべると、いよいよ本格的に彼女を征服しにかかる。

彼は彼女の細い腰を抱えこむと、真上から鋭い挿入を繰り返しはじめたのだ。

「あ、ああああ、そ、そんな、あ、っはああ、た、かやまあ」

口を覆って、懸命に声をこらえようとするも、コツをつかんできた高山は、ずっずつとリズムカルにピストン運動を繰り返す、舞羅を追いつめてゆく。

「つきや、あ、つは、う、ううつ。んんん！」

俗に言うマンガリ返しの体勢にされた舞羅。黒いニーソックスに包まれたしなやかな足が、宙でがくがくと頼りなげに揺れている。

斜め上から何度も力任せに屹立で膾内うがを穿たれ、彼女は幼い顔を蕩とろけさせて、はあはあと愛らしく喘ぎつづける。

「ああ、ああああっ、高山つ、ま、またあつ、わたくしつ、もおっ！」

「くっう！ 舞羅。俺も、もう限界、だつ、うおおお」

やがて、高山が吼ほえた瞬間、彼女のなかで剛直はが爆ぜた。

先ほど出したとは思えないほど大量の精液が、少女の子宮を満たしてゆく。

同時に達した二人は、互いにきつく抱きしめ合って、射精の余韻に浸る。

「……ついに、しちまった」

高山は感極まった声をもらすと、舞羅の頭をかき抱く。

「……だって、好きなもの同士なら、して当然のことって、高山言っていましたでしょう？」